歴史に学ぶ北陸経済の『強み』

日本銀行金沢支店
支店長　吉濱　久悦

2024年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

また、私ども日本銀行の金融経済調査をはじめ、業務運営に、日頃よりご理解とご協力を賜り、心から感謝申し上げます。

昨年の北陸経済を振り返ると、経済を下押ししてきた新型コロナウイルス感染症の影響減衰、半導体の供給制約の緩和継続等により、コロナ前の社会経済活動の水準を取り戻す過程の1年であったと思います。

「北陸の金融経済月報」では、2023年10月に、「緩やかに回復している」と判断を引き上げました。個人消費では、コロナ後の人流増加に伴い、繰越し需要が顕在化したこと、また所得環境改善にも支えられ、コロナ前の水準を回復し、なお、緩やかながら改善傾向を続けています。

短観からみた業況感（業況判断DI）も、2023年6月にコロナ前の水準となりました。対面型サービス業の回復、供給制約緩和に伴う乗用車販売の増加、原材料・エネルギー等の仕入価格の上昇に対して価格転嫁を進め、売上増加に繋げたことが背景となっています。

日本銀行金沢支店は、昨年11月、1909年の開設以来、初めて移転しました。114年振りの移転は、北陸経済の歴史を振り返る好機にもなりました。明治維新後、金沢の街は、「武家社会」であったが故に、衰退は著しかったと言われています。しかしながら、文化的な土壌を大切にしつつ、明治後半、モノづくりの伝統と人材を活かし、近代工業化を成し遂げ、米穀以外にも、羽二重（織物）など重要商品の生産地やその関連産業の拠点として、日本海側で重きをなしました。日本海側で初の支店開設の背景には、このような北陸の経済的発展がありました。

今日の人口減少の下、地域では、高い付加価値を生み出す産業構造の構築が求められています。その際、北陸が培ってきた強み、①付加価値の高い文化的な観光、②クリーンエネルギーを活用したモノづくりの伝統、③経済産業の担い手を育成するための人材教育をさらに磨き上げる視点が重要です。

本年の干支である「辰」に因んだ、「龍の水を得る如し」という言葉があります。

北陸経済界が伝統的な強みを活かして、本年が素晴らしい一年になることを祈念しております。